

# 本動詞「いく」、「くる」と軽動詞「いく」、「くる」の意味分析

村田 明

キーワード : 本動詞, 軽動詞, 補助動詞

## 要旨

「いく」、「くる」の用法を整理すると3種類の「いく」、「くる」が現れてくる。これら为本動詞「いく」、「くる」、軽動詞「いく」、「くる」、補助動詞「いく」、「くる」と呼ぶ。本動詞と補助動詞の「いく」、「くる」は物理的移動動詞であるが、軽動詞の「いく」、「くる」は心理的移動動詞である。軽動詞の「いく」、「くる」は心理的移動動詞であるので、物理的移動動詞としての本動詞や補助動詞の「いく」・「くる」のNSM記述と均質的なNSM記述はできないことを指摘する。

## 1. 目的

(1)(2)は村田(2000)で明らかにした「いく」と「くる」のNSM<sup>1)</sup>による意味表記である。

### (1) a. 本動詞「いく」

Xが(昨日)いった=  
この前にXはどこかにいた  
Xは他のところにいたかった  
そのためにXはある時間(昨日)移動した  
そのためにその後Xはその場所にはいなかった  
Xは他のところにいた

### b. 軽動詞「いく」

Xが(昨日)いった=  
この前にXはどこかにあった(いた)  
Xはある時間(昨日)移動した  
そのためにその後Xはその場所には(い)なかった  
Xは他のところにあった(いた)

### (2) 本動詞「くる」

Xが(昨日)場所Aにきた=  
Xが話者の場合、今XはAにいる。  
この前にXはどこかにいた  
Xは他のところにいたかった。  
そのためにXはある時間移動した  
そのためにその後Xはその場所(場所A)に(昨日)いた  
その場所にいる誰かが「Xは私と同じ場所にいる」と思うであろう

「いく」と「くる」の分析としては、(1)(2)は2つの点が不十分である。第1点は、軽動詞「くる」の分析が全くなされていないことである。第2点は、軽動詞「いく」が本動詞「いく」と同じ物理的移動という観点からしか記述されていないことである。

第2節では、「いく」と「くる」の用法を調べ、全ての「いく」・「くる」を単に物理的移動として(1)(2)に示されているようなほぼ均質なNSM記述することはできないことを示す。次に、第3節で、村田(2000)で不十分であった軽動詞「いく」と「くる」のNSMによる意味記述をおこなう準備段階としての軽動詞「いく」と「くる」の目立った意味的特徴を指摘する。

## 2. 「いく」と「くる」の3用法

本動詞の「いく」と「くる」は基本的には意志を持つものがその主語となる。

- (3) a. 社長がそこへいった。  
b. 社長がここに来た。
- (4) a. ?犬がアルプス公園へいった。  
b. ?犬がアルプス公園に来た。
- (5) a. ??車が街へいった。  
b. ??車が街に来た<sup>2)</sup>。
- (6) a. \*雲が東の空へいった。  
b. \*雲が家の上空にきた。

(3)~(6)と許容性が減少していくのは、本動詞の「いく」と「くる」が主語に動作主性を要求しているからであると思われる。(4)~(6)の非許容性が次の例では解消されている。

- (7) a. 犬がアルプス公園へとぼとぼと歩いていった。  
b. 犬がアルプス公園にとぼとぼと歩いてきた。
- (8) a. 車が街へ走っていった。  
b. 車が街に走ってきた。
- (9) a. 雲が東の空へ流れていった。  
b. 雲が家の上空に流れてきた。

なぜ、(7)~(9)の「いく」と「くる」は主語に動作主性を要求しないのであろうか。これらの例の主語と選択関係を持っているのは「いく」と「くる」ではなくてその前にある

動詞とである。

- (10) a. 犬が歩いた。  
b. 犬が歩いてきた。
- (11) a. \*犬が降った。  
b. \*犬が降ってきた。
- (12) a. 雪が降った。  
b. 雪が降ってきた。
- (13) a. \*雪が歩いた。  
b. \*雪が歩いてきた。

動詞テ形+「いく」・「くる」の「いく」・「くる」は心理的移動を表す軽動詞で、主語+動詞テ形<sup>3)</sup>の表す事象がある点から遠ざかる・ある点に近づくことを表している。統語上は動詞テ形が軽動詞「いく」・「くる」に編入して、動詞テ形の主語が軽動詞「いく」・「くる」の主語のように見えている<sup>4)</sup>。軽動詞「いく」・「くる」は心理的移動を表しているのので、個癖的な制限を受けると考えられ、軽動詞「いく」の編入を許さない動詞がある。

- (14) a. 雪が降ってきた。  
b. \*雪が降っていった。

軽動詞の編入によるのではなくて、元々心理移動を表している動詞もある。

- (15) a. 電車がやってきた。  
b. \*電車がやった。

(15a)は電車が到着するという事象がある点に近づいてきたことを表現している。「やってくる」を心理移動動詞であると考えられる理由は、もし「やってくる」が物理的移動の動詞であるなら、なぜ「やっっていく」と言えないのかが不明であるからである。

- (16) \*電車がやっていった。

このような場合は、例えば(17)のように表現するであろう。

- (17) 電車がいってしまった。

「やってくる」、「いってしまう」の短縮形として単に「くる」・「いく」を使うことができる。

- (18) a. 電車がきた。  
b. 電車はいった。

「やってくる」、「いってしまう」が心理移動動詞であり、(18)の「いく」・「くる」がその短縮形であると考えることによって、なぜ(18)の主語に動作主性が要求されていないのかが説明できる。

「いく」・「くる」の第3番目の用法は、「～てから」に書き換えることができる動詞テ形または、動詞連用形+「に」に続く「いく」・「くる」である。

- (19) a. 掃除をやっっていく。  
b. 掃除をやってからいく。

- (20) a. 掃除をやってきた。  
b. 掃除をやってからきた。
- (21) a. ガス栓を止めていった。  
b. ガス栓を止めてからいった。
- (22) a. ガス栓を止めてきた。  
b. ガス栓を止めてからきた。
- (23) a. カラオケを歌いにいった。  
b. カラオケを歌いにきた。
- (24) a. アメリカに働きにいった。  
b. アメリカに働きにきた。

この用法の「いく」「くる」を補助動詞「いく」「くる」と呼ぶ。補助動詞「いく」「くる」が使われている場合は、統語上、文全体の主語は「いく」「くる」の主語であり、テ形動詞及び動詞連用形+「に」の主語は文全体の主語に制御されている空範疇であると考えられる。従って、主語はテ形動詞及び動詞連用形に対する選択制限だけでなく、本動詞「いく」「くる」に対するのと同じ選択制限も満たさなければならない。

- (25) a. 太郎が戸を閉めた。  
b. 太郎がきた。  
c. 太郎が戸を閉めてからきた。  
d. 太郎が戸を閉めてきた。
- (26) a. 太郎がいった。  
b. 太郎が戸を閉めてからいった。  
c. 太郎が戸を閉めていった。
- (27) a. 風が戸を閉めた。  
b. \*風がきた。  
c. \*風が戸を閉めてからきた。  
d. \*風が戸を閉めてきた。
- (28) a. \*風がいった。  
b. \*風が戸を閉めてからいった。  
c. \*風が戸を閉めていった<sup>5)</sup>。
- (29) a. 太郎が本を買った。  
b. 太郎がいった。  
c. 太郎が本を買いにいった。
- (30) a. 太郎がきた。  
b. 太郎が本を買いにきた。
- (31) a. 雲が東の空に浮かんだ。  
b. \*雲がいった。

c. \*雲が東の空へ浮かびにいった.

(32) a. \*雲がきた.

b. \*雲が東の空に浮かびにきた.

以上、「いく」・「くる」の3用法をまとめた.

### 3. 軽動詞「いく」・「くる」の意味

村田(2000)で「いく」・「くる」の意味を(1)(2)に示すようにある程度まで記述したが、ここで見やすくするために同じものを(33)(34)に再録する.

(33) a. 本動詞「いく」

Xが(昨日)いった＝

この前にXはどこかにいた

Xは他のところにいたかった.

そのためにXはある時間(昨日)移動した

そのためにその後Xはその場所にはいなかった

Xは他のところにいた

b. 軽動詞「いく」

Xが(昨日)いった＝

この前にXはどこかにあった(いた)

Xはある時間(昨日)移動した.

そのためにその後Xはその場所には(い)なかった

Xは他のところにあった(いた)

(34) 本動詞「くる」

Xが(昨日)場所Aにきた＝

Xが話者の場合、今XはAにいる.

この前にXはどこかにいた

Xは他のところにいたかった.

そのためにXはある時間移動した

そのためにその後Xはその場所(場所A)に(昨日)いた

その場所にいる誰かが「Xは私と同じ場所にいる」と思うであろう

1節でも述べたように、(33)(34)は軽動詞「いく」・「くる」の記述が不十分である。とくに、「くる」に関しては軽動詞としては全く記述されていない。本節では、本動詞及び補助動詞の「いく」・「くる」は(33)(34)の記述で良いとして、補助動詞「いく」・「くる」のNSMによる意味記述の準備段階としてその目立った意味特徴を指摘する。

軽動詞「いく」・「くる」が心理的移動を表すというのは、その到達点・出発点が抽象的な空間のある1点を意味しているというのではなくて、移動の対象が主語+テ形動詞の表す事象であるということである。テ形動詞を軽動詞「いく」・「くる」に編入することによっ

てこの事象に特別な意味あい加えられる。その特別な意味あいを推測してみる。

- (35) a. 雲が流れた。
- b. 雲が流れていった。
- c. 雲が流れてきた。

(35a)と(35b,c)の意味の違いは、前者では雲が流れていない状態から流れている状態への状態変化を含意しているのに対し、後者ではその含意が消されているところにあると思われる。

- (36) a. 車が走った。
- b. 車が走り始めた。
- (37) a. 車が走っていった。
- b. ? \*車が走っていき始めた。
- (38) a. 車が走ってきた。
- b. ? \*車が走ってき始めた。
- (39) a. アメリカで言語学を研究した。
- b. アメリカで言語学を研究し始めた。
- (40) a. アメリカで言語学を研究していった。
- b. \*アメリカで言語学を研究していき始めた。
- (41) a. アメリカで言語学を研究してきた。
- b. \*アメリカで言語学を研究してき始めた。

(36)(39)のb文が自然な文であるのに対し、(37)(38)(40)(41)のb文が不自然な文であるという事実は、軽動詞「いく」・「くる」にはその前にある主語+テ形動詞の表す事象の存在に関する状態変化が含意されていないことを示していると思われる。つまり、問題になっている事象が持続的の流れとして心理的にある点から遠ざかる(軽動詞「いく」)・ある点に近づく(軽動詞「くる」)ことを表していると考えられる。本動詞「いく」・「くる」に「始める」を付けると、習慣的或いは主語の集団性による複数の物理的移動を表すようである。

- (42) a. 大学を卒業してから太郎は外国へいき始めた。
- b. \*大学を卒業してから太郎は外国で研究していき始めた。
- (43) a. 戦争が終わって多くの外国人がき始めた。
- b. \*戦争が終わって多くの日本人が留学してき始めた。

本動詞「いく」・「くる」に相動詞「始める」を続けることは、本動詞「いく」・「くる」が物理的移動を表しているので問題は生じないが、軽動詞「いく」・「くる」に相動詞を続けることは、軽動詞「いく」・「くる」が心理的移動を表しているので特殊な制限を受けるようである。軽動詞「いく」・「くる」であっても、その前のテ形動詞が移動の様態を表しているような場合は相動詞「始める」を付けることができるようである。

- (44) a. 太郎が予備校へいき始めた。

- b. 太郎が歩いて予備校へいき始めた.
- (45) a. 7時半になって生徒たちが学校にき始めた.  
b. 7時半になって生徒たちが走って学校にき始めた.

もしかすると様態を表すテ形動詞に続く「いく」・「くる」は軽動詞として扱うべきではないのかもしれないが、本稿ではこれ以上追求はしない。

## 結 論

移動動詞「いく」・「くる」には本動詞，軽動詞，補助動詞の3種の使い方があり，軽動詞「いく」・「くる」にはテ形動詞が編入していることを提案した。この編入によって軽動詞「いく」・「くる」は物理的移動ではなく事象のある点への心理的移動を表していることを主張した。

## 注

- 1) Wierzbickaによって提唱されたNatural Semantic Metalanguage (以後NSMと略記)は意味を論じるための自然な汎用言語のことで，Wierzbicka(1996)では次のようなNSM semantic primitivesが提唱されている。

Substantives : I, YOU, SOMEONE, PEOPLE/PERSON ; SOMETHING/THING

Mental predicates : THINK, KNOW, WANT, FEEL, SEE, HEAR

Speech : SAY, WORD

Actions, events, and movement : DO, HAPPEN, MOVE

Existence : THERE IS

Life : LIVE, DIE

Determiners : THIS, THE SAME, OTHER

Quantifiers : ONE, TWO, SOME, ALL, MANY/MUCH

Evaluators : GOOD, BAD

Descriptors : BIG, SMALL

Time : WHEN/TIME, NOW, BEFORE, AFTER, A LONG TIME, A SHORT TIME, FOR SOME TIME

Space : WHERE/PLACE, HERE, ABOVE, BELOW; FAR, NEAR, INSIDE

Interclausal linkers : BECAUSE, IF

Clause operators : NOT, MAYBE

Metapredicate : CAN

Intensifier, Augmentor : VERY, MORE

Taxonomy, partonomy : KIND OF, PART OF

Similarity : LIKE

- 2) 無意志主語が本動詞「くる」に対して使われることもあるように思われる。

i) 電車がきた。

ii) 冬がきた。

このような例に対しては2つの考え方があると思われる。第1は、このような例では擬人化が作用していると考え、無意志主語に意志を与える。第2は、この例の「くる」は物理的移動の「くる」ではなくて、心理的移動の軽動詞「くる」であると考え。なぜ、軽動詞「くる」であれば無意志主語が使えるのかに関しては、以下で論じる。

3) 動詞テ形には「～てから」と書き換えのできる用法があるが、この用法の動詞テ形に後続する「いく」・「くる」は軽動詞ではなく補助動詞として分類する。従って、次の i) ii) iv) の「いく」・「くる」はここで言う軽動詞ではないが iii) の「くる」は軽動詞である。

i) a. 掃除をしてきた。

b. 掃除をしてからきた。

ii) a. 掃除をしていった。

b. 掃除をしてからいった。

iii) a. アメリカで大変な経験をしてきた。

b. \*アメリカで大変な経験をしてからきた。

iv) a. 日本で十分に経験を積んでいった。

b. 日本で十分に経験を積んでからいった。

4) 動詞テ形+「いく」・「くる」の意味としては別の考え方もできる。テ形動詞が「いく」・「くる」に編入されると、本来テ軽動詞の主語であったものが一種の擬人化を受け、「いく」・「くる」の選択制限を満たせるようになると考えるやり方である。編入複合動詞「～ていく」・「～てくる」に強く物理的移動が感じられる場合にはこの代案が魅力的であるが、ここではこの考え方は追求しない。

5) 「いく」が補助動詞の「いく」であれば、この文は許容できるが、その場合 (28c) は (28b) と同じ意味ではない。

## 参考文献

Wierzbicka, Anna 1996 Semantics, primes and Universals. Oxford: Oxford University Press.

村田 明 2000 日英語対照— 'go', 'come', 「いく」, 「くる」の異同,  
『信州大学留学生センター紀要第1号』